

タイトル	人間関係論による"いじめ"構造の分析：遺書の解釈を例として
著者	小島，康次
引用	開発論集，74：71-84
発行日	2004-10-30

人間関係論による“いじめ”構造の分析

——遺書の解釈を例として——

小島 康次*

はじめに —— 生物学的な死と社会的な死

澤田愛子(1996)の『末期医療からみたいのち』によれば、末期癌患者が死の受容に際して感じる不安、恐怖の中身は、従来考えられてきたような「末期の苦痛」や「消滅への恐れ」に尽きるものではなく、むしろ、築き上げてきた人間関係の絆が理不尽に断ち切られることへの恐怖であるという。残された人生の生物学的な長さからすれば、若い人ほど失う時間は多い計算になり、それだけ悔しき、苦痛も大きなものとなるはずである。しかし、実際は中年の家族を持ち、社会的な関係を築き上げた人の方が死への強い不安、恐怖を表明する場合が少なくない。また、若い人の中には、自分の命を簡単に捨てたり、数は少数であっても、他者の命を大した理由もなく奪ったりする例が見られる。この種の事件が起こると、必ず、命の大切さを教育することの重要性が問題となるが、「死にたい」「殺したい」という意識と、実際にそうしたことを実行に移すこととの間には決定的に大きな距離があると考えられる。それを防ぐのは単なる言葉による教育ではないであろう。もっと具体的で濃密な家族や友人との人間関係の構築こそが必要とされる。

末期癌の患者が失うことを恐れるものは、長い時間と努力を傾けて築き上げてきた豊かな人間関係であり、それを近い将来にさらに実りあるものにしようとする自らの意思である。つまり、これを社会的な死への恐怖と呼ぶことはあながち的外れではないであろう。

1. 「お葬式ごっこ」—— 主題としての社会的な死

“いじめ”は我々の想像力を越えたところで、しかも、飽くまで遊びとして営まれることがある。後で、遺書の解題を試みる1986年2月に自殺したT君をめぐる「お葬式ごっこ」とは、どのようなものだったのだろうか。

T君が、病欠した次の日、教室に入ってみると、そこは急ごしらえの斎場になっていて、級友らがT君の葬式をやっていた、というものである。彼が“いじめ”を苦にして自殺する約2ヶ月前のことである。黒板の前に故人(T君)の机を置き、写真と追悼の寄せ書きが飾られ、花や線香、飴玉数個と夏みかんの供物まで載せられていた。黒板にはそれらしく雲の模様が

* (こじま やすじ) 開発研究所併任研究員、本学経営学部教授

チョークで描かれていたという。色紙の中央には、「さよならT君」と書かれ、まわりに寄せ書き風にT君への別れの言葉が記されていたのである。そこには、担任の教師（他3名の教師）の名前まであった。

菅野（1986）は、この「葬式ごっこ」が、演出した少数の生徒と、その筋書きにしたがって机を運び、供物を用意し、寄せ書きを回覧したそれよりも多くの生徒たち、さらに黙って浮かぬ顔をして（ニヤニヤしていたかもしれない）これを取り巻いていた多数の生徒たちによって上演された一幕の劇だと喝破する。それは社会風刺とはもっとも遠い、個人風刺劇であり、ここでみられる笑いはT君に対する棘を含んだアイロニーであるという。

この一場の劇で彼らが演じていることの意味は、T君に対する次のような強烈なメッセージであろう、「君は形式上、教室の一員であり、われわれの仲間だが、君の社会的存在はわれわれの存在より軽く、社会的存在の基準に達していない。だから、われわれは君を一人前の生きた人間として認めるわけにはいかない。」つまり、「君は、ヒトとして一応生きてはいるが、社会的には死んでいるも同然だ。」ということを手の込んだアイロニーを用いて劇に仕立てたのだ。

T君が教室に現れた時、彼のまわりのクラスメートたちはニヤニヤしながら彼の様子をうかがった。この笑いは葬式の場にそぐわないものであり、彼に対するアイロニー以外の何物でもなかった。それは、「おや、君はちゃんと生きているじゃないか。」と言うことによって、「お前は社会的に死んでいる。」というメッセージを弾き出す、レトリックではなかったのか。菅野（1986）の例を引用すれば、外出を予定していた朝、期待に反する雨空を見上げて、「チェ、なんていい天気なんだ。」と吐き捨てるように言うのと同じことなのである。

それに対するT君の反応は、怒りでも悲しみでもなく、「あれえ」という笑いだったそうである。その色紙を親に見せ、「ぼくはこんなに人気がある」と言ったとも伝えられている。この不可解な反応については、後で述べることにしよう。

2. 「遺書」の意味

小島（1997、2000）は、“いじめ”の心理—社会的な要因について物語論的分析を行ったが、本論では、そこで触れることができなかった、いじめられる側の心理を人間関係論の視点から検討してみる。時日は離れているが、ともに“いじめ”が原因で自殺した中学生の遺書を二つ検討してみよう。これらは、生物学的な死と引き換えに社会的な死を免れようとする最後の絶望的な試みだと言える。そのうちの一つは、先に述べた「お葬式ごっこ」の二ヶ月半後、実際に自殺を遂げたケースである。新聞紙上に掲載されたものをそのまま末尾の資料として載せた（資料1、2）。

これらの遺書を一読して気付くのは、文の長さ、内容が大きく違っているにもかかわらず、受ける印象が非常に類似しているということである。まず、どちらもこれが自殺する直前の遺書かと疑うほど明るい筆致だということに戸惑いを感じる。これから死ぬということ、ちよっ

と距離を置いて、あたかも他者について語っているかのように、冷静に述べている。自分の死についての無念さに対する感情的な表現はほとんど無く、自分を自殺に追い込んだいじめっ子に対する恨みの気持ちなども書かれていない。いや、むしろ、そうしたいじめっ子たちに対する配慮のようなものすら感じさせる。

このような文体上の特異さをもって、当該の中学生の文学的才能を評価する論評さえ見られたのは興味深い事実であろう。それが誤解であるとしても、確かに女子中学生同士の交換ノートのような、話し言葉をそのまま文字にした類の文体とは一線を画すものであることは否定できない。それでは、遺書に書かれていた内容はどのように解釈できるのだろうか。次に、二人の“いじめ”によって自殺した中学生（男子）の遺書を詳細に検討してみることにしよう。

3. T.S.君の遺書——1986年2月

T.S.君(以後、T君と略)は、1986年2月、東京都中野区富士見台中学の2年生だった年に、いじめを苦に祖母の家のある盛岡のデパートのトイレの中で自殺しているのが発見された。その側にあった紙袋に、次のような「遺書」が記されていた。

「家の人、そして友達へ。

突然姿を消して申し訳ありません。

くわしい事はOとかNにきけばわかると思う。

俺だって死にたくない。だけどこのままじゃ「生きジゴク」になっちゃうよ。ただ、俺が死んだからって他のヤツが犠牲になったんじゃないか。だから、もう君達もバカな事をするのはやめてくれ、最後のお願いだ。」

その後、T君をめぐる、教室でいわゆる「お葬式ごっこ」なることが行われ、担任教師までもがその一端に加わっていたことが判明し、マスコミに大きく報道されることとなった。「お葬式ごっこ」そのものの意味については、先に述べたのでここではそれ以上、詳しく論じない。

さて、この事件に関する多くの出版物の中で、単なるジャーナリスティックな興味に留まらず、現代の思想状況にまで目配りした著作を挙げるとすれば岸田(1987)、菅野(1986)が該当する。それぞれ、精神分析と哲学という異なるバックグラウンドからの論述ではあるが、現代社会に対する深い洞察に基づく考察は、共通の病理を抉り出しているように思われる。

T君に対するいじめがどのようなものだったかについて、岸田(1987)は、主に宮川(1986)を参考に述べている。それは概略、次のようなものだった。

T君はいわゆる気の弱いタイプだったが、そうした自分に反発を感じていたようで、遺書に名前の出てくるO君、N君のつっぱりグループの使い走り役を自ら買って出て、彼らのグループで重宝がられていたようである。つっぱりグループの中で、T君は「気軽に使い走りをする

便利なヤツ」という役割を自ら進んでこなすことにより、仲間から認知されていたと考えられる。しかし、T君は、弱い自分に対する反発からこのグループに近づいた事から分かるように、使い走りの役割に固定されることには満足できなかったに違いない。徐々にO君やN君に対して不満をもらすようになり、やがて、使い走りの買い物の釣銭を全額返さず、自分の懐に入れてしまうというようなことが起った。これはいわば、自分の役割に対する「回りくどい抵抗だったのではないか」(岸田、1987)という。断固たる抵抗が一時的には大きな葛藤状態を生み出すとしても、それを契機に事態が打開されるという展開も十分あり得るのに対して、弱々しく、中途半端な抵抗は、一般に事態をますます悪くするものである。この場合も、T君の役割(使い走り)拒否はグループの秩序を乱す無責任な行動放棄と見なされ、仲間からの制裁を受ける結果を引き起こした。

4. 自己否定とヴァルネラビリティ

そもそもT君の自分の弱さに対する反発、つまり自己否定の感情は、危険な自己言及性のパラドックスを孕んでいると考えられる。自分の弱さを否定する自分も、否定された自分と無関係ではあり得ないのである。だから、一旦、自己否定の感情が支配し出すと、自己否定の無間地獄にはまり込んで中々抜け出せなくなる。いわば、弱い自分を否定し、強さに憧れるもう一人の自分が弱い自分をいじめることにもなりかねない。

このような場合、竹川(1993)のヴァルネラビリティ(いじめ誘発性)の状況が出てくるのかもしれない。つまり、仲間たちが制裁を加えてもT君はそれに積極的に反発せず、むしろ、自分へのいじめを是認している面があったということである。クラスメートによると、彼は、顔にマジックを塗られたり、廊下で踊らされたり、服にマヨネーズをかけられたりと、色々ないじめをされた際に、ヘラヘラ笑っていたという。「お葬式ごっこ」に際会した時、また、「いじめ」に際してT君が示した「笑い」は何を意味するものだったのだろうか。

幼児期に親からの虐待を経験した者に多重人格障害が起ることが知られている。勿論、虐待を受ければ必ず多重人格障害に陥るというわけではない。しかし、多重人格障害者を調べると、その多くが、幼児期に親あるいはそれに代わる養育者から虐待を受けているという臨床例の報告がアメリカの精神医学会で多くなっているという(小此木、1995)。

虐待と多重人格という一見全く異なる現象が互いに密接に結びついているとはどのようなことを意味しているのだろうか。

乳幼児にとって親との関係は唯一のそして絶対的な人間関係である。親が自分に対して厳しい対応をするのは、子である自分に非があるからだと解する。親は子にとって絶対的なモデルであり、全てである。暴力さえも自分に対する愛情の故と解することすらある(虐待する親自身もそう信じ、言明することも少なくない)。これは虐待の再生産という悪循環を惹き起こすメカニズムでもあるが、ここでは、子の側の解離(あるいはスプリッティング)に焦点を当てて

検討を加えよう。

正確には、解離とスプリッティングとは全く異なる概念であるが、そうした現象が起こる基本的なメカニズムには共通性がみられる。

5. 加害者への投影同一視——「もう一人の自分」の生成

メラニー・クライン (Klein, M.) の対象関係論は、乳幼児の母親への攻撃性をテーマにした、フロイト以後の精神分析理論である (Klein, M., 1957)。フロイトは (男児と) 母親との間に近親相姦的な願望の存在を洞察し、父親に対する死の願望をエディプス・コンプレックスとして定式化した。そのために、母親に対する攻撃性、見捨てられ不安等にはほとんど注意を払わなかった。これはフロイト自身の抱えた女性に対する問題からの逃避だという議論もある (小此木, 1995) が、ここでは、その問題には立ち入らず、クラインの理論を出発点にする。

フロイトが 1920 年代以後、それまでの素朴な適応論から離れて、大胆な仮説を次々と提示したことは周知の事柄であろう (フロイト, S., 1970)。その一つに、死の本能の措定がある。本能とは元々、生存のための適応メカニズムであり、「生の本能」というのは過剰な用語でしかないのだが、死の本能を考案するに及んで、生の本能という用語の必要性が生じた。死の本能は、戦争神経症や、孫エルンストの遊びの観察を通じて、フロイトがそれまでの理論の土台としてきた「快樂原則」に対する疑問に端を発した概念であり、素朴な適応論を超え出るものとして後の精神分析理論に大きな影響を与えた概念である。

クラインによれば、人間には生まれつき生の本能と死の本能があり、死の本能は乳児の不安の源泉となるので、それから身を守るために投影という防衛機制を用いるというのである。投影 (あるいは投射) とは、フロイトの自我防衛機制においても重要な位置づけをされているメカニズムであるが、自己の中の良い部分と悪い部分が同時に存在することに対する不安を回避するために、それらを切り離し (スプリッティング)、そのいずれかを外界の対象に投影することにより、自分とその投影された対象とを同一視する機制である。一般的には、自分自身の内にあるものではあるが、それを認めると心的危機に陥るような危険な情動を、外的なものに帰属させることで危機を回避し、逆に、授乳の際に感じるような心地よい感情は、自分の内にあるものとして取り入れることを指す。

乳幼児期に起こるべきこうしたクラインの妄想分裂ポジションと呼ばれる発達段階は、その後に来る抑うつポジションを経てもなお、生涯にわたって維持されるものと考えられる。

T君にとってO、Nというグループのボスたちは、初めは良い対象だったはずである。彼が求めて得られなかった強さを形の上だけでも与えてくれる存在だった。時には、下級生からバカにされたT君に対し、彼自身よりも、O、Nの方が怒り、その下級生に制裁を加えるようT君を叱咤したこともあったそうである。その時点では、T君は、強く望ましい自分をO、Nに投影し、取り入れていたものと思われる。

O、NがT君に対して制裁を加える悪い対象になった時、T君は自分の内なる弱く否定すべき自己をスプリッシングし始めたのではないだろうか。使い走り拒否し、ボスに楯突くT君は、もはやグループにとって役立たず、であるどころか、目の上のコブのような目障りな存在になってきたに違いない。グループの一員であることを直接的に否定する代わりに、クラスメートの前でこれ見よがしに制裁を加えることで、彼らは自分たちの体面を保つ道を選んだ。それはグループ内の制裁にとどまらず、やがて、グループを越えた、クラス全体の“いじめ”に変質していく。

「お葬式ごっこ」はその極まったところで起きた“遊び”であった。あの劇で彼らが演じたのは、「われわれは君を一人前の生きた人間として認めるわけにはいかない。」ということ、すなわち、「君は、社会的には死んでいるも同然だ。」ということを経法的に言い渡す芝居仕立てのジョーク（アイロニー）だった。“いじめ”でよく見られる「死ぬ」という直接的な言葉の暴力こそ投げかけられなかったが、実際にはそれと同等の暴力的な場面が展開していたのである。いじめる側がどこまで気づいていたかは不明であるが、飽くまで“いじめ”としてではなく、“遊び”としての筋書きによって事が進行していったのは、T君自身の曖昧な態度に起因している面があっただろう。

先に述べたように、こうした事態に対してT君は怒るでもなく、悲しむでもなく、笑っていたという。しかし、彼は決してこの事態を冷静に受け止めていたのではなかった。遺書にある「生きジゴク」とは、まさに、「生きたまま死んだ状態」を指している。「お葬式ごっこ」をされるまでもなく、彼はジワジワと「社会的な死」に追いつめられていく自分を感じていたに違いない。これが生物学的な死よりも恐ろしいものであることは冒頭論じた通りである。

自己の死を意味する社会的な死を認めるわけにはいかない。すでに“いじめ”に際してスプリッシングが起こっていたものと想像される。彼が「お葬式ごっこ」の時に示した笑い、また、“いじめ”に際して示した「ヘラヘラ笑い」は、彼の中に彼自身をいじめるもう一人の自分が存在していたことを表してはいまいか。それは、投影同一視によっていじめる側のN、Oと一体化した自分であり、死にかかっている自分を切り離して（スプリッシングして）、彼らと一緒に笑っている自分である。

「遊び」という様相は、いじめる側にとって都合が良かっただけでなく、T君自身にとっても自我の最後の砦を守る自己欺瞞のために必要だったのかもしれない。これは、“いじめ”ではなく、“遊び”なのだ、という状況を共有することによって、彼自身、それが本当に遊びである、という錯覚に陥っていた。いや、どこかで気づいていた“いじめ”をT君はどんなに、本当の遊びであればよいと夢想していたことだろう。

6. 自殺に至る心の軌跡——優劣の逆転はあったか？

岸田（1987）は、スプリッシングを被害者と加害者の差異を消し去る試みとして、次のよ

うに論じる「いじめられている現実から目をそらすことによって、いじめを避けようとするT君のこのような努力は逆効果を招き、いじめはますますエスカレートします。『みんなと楽しくふざけているんだ』という物語は破綻するわけです。

加害者と被害者の差異を消し去ろうとするこの物語ではうまくゆかないことを悟ったT君は、方針を転換し、別の物語を紡ぎ始めます。

(中略)

……今度は、加害者と被害者の差異を逆に際立たせ、その優劣を逆転させることによって、同じ目的を追求します。」

岸田(1987)は、「加害者が必ずしも優越しているのではなく、人をいじめて喜ぶあさましい奴、自分が何をしているのかもわかっていない馬鹿、人を平気で苦しめる悪人であり、被害者である自分は、彼らの愚行、悪行を寛大に許す心広き善人、彼らと争うようなつまらないことから超越している賢者であるといった物語」を作るのだと言う。この点を岸田は、T君の遺書を辿ることによって、次のように論じる。遺書中に描かれているT君自身の像は、死をもってO、Nの愚行を諷める健気な自己犠牲者で、逆に、O、Nは、T君が諭してやらなければクラスのメンバーを気ままにいじめる馬鹿な連中、ということになる、という。この遺書を読んだ人々は、O、Nを、むやみに人をいじめる愚者、T君を、命を賭けて正義を貫く賢者、と感じるようにストーリーが作られている、という。そして、このストーリーは、残酷にも、T君の死によってしか実現しないのである。生きている限り、いくらT君が自分の心の中で、そうした自己欺瞞のストーリーを創作しても、現実には依然としてO、Nが優者であり続け、T君は彼らに存分にいたぶられる屈辱的な存在であることに変わりはない。

また、このストーリーは先に述べたヴァルネラビリティとも結びつく危険性を孕んでいる。本当の、いじめられている自分を否定するために、もう一人の、いじめに耐えて、いじめっ子達を寛大に見下す優者としての自分を創り出したことで、そうした「いじめに耐える」場面を敢えて避けようとしなない場合が生じる。岸田によれば、「あえてわざわざいじめを招くようなことすらやりかねません。」ということになる。

確かに、岸田の議論には首肯できる部分が多く、遺書の解釈も大筋で了解できる。しかし、T君がいじめっ子に対する優劣逆転のストーリーを完遂するために自死を選んだというのは、一面で理解できるものの、全てを説明しているとは言い難いように感じる。

7. 二つの遺書の共通点

K.O.君(以後、K君と略)は、愛知県西尾市立東部中学校二年だった1994年12月、いじめを苦に自殺した。その遺書が全文公表され、マスコミに大きく報道された。T君の遺書が数行の短いものだったのに対して、K君の遺書は用紙四枚に綴られたものだった。

K君の遺書の文体も、T君のそれと同じく、明るく、どこか他所事のような突き放した感じ

を抱かせるものだった。

T君、K君に共通している第一の点は、いじめられていることを明言しているにもかかわらず、また、いじめについて述べているにもかかわらず、いじている側の生徒に対して、直接的に非難したり、告発したりしていないことだろう。確かに、T君は「もういじめをやめろ、他のヤツが犠牲になったんじゃないじゃないか。」と呼びかけているが、それは自分自身に対するいじめの告発というより、自分の死後、他のクラスメートにいじめが向かったのでは、自分の死の意味がなくなる、ということだった。K君は、いじめた生徒達を「4人の人(名前が出せなくてすみません。)」と匿名にして、名前を明示すらしていない。また、「僕からお金をとっていた人たちを責めないで下さい。僕が素直に差し出してしまったからいけないのです。」というように、いじめた側を非難するよりも自分を責める表現が随所にみられる。これは一見奇異に感じられる。というのは、死を覚悟し、遺書が発見された後ではもはや彼らにいじめられる心配もなく、彼らに遠慮すべきこともないはずだと考えられるからである。

第二の点は、遺書を書いている自分が既に死後の自分であるかのように、死後の自分の視点からの文体になっている点である。T君の遺書においては「突然姿を消して申し訳ありません。」という書き出しだった。これは、家族や友達の前からいなくなり、盛岡市に来ていることを指しているとも取れるが、同時に、既に死によって自分がいなくなっていることを意味しているとも取れる表現である。K君の遺書では、「僕はもうこの世からいません。」と微妙な表現になっている。これは文法的にまちがいは言えないかもしれないが、不自然な文章である。正しくは、「僕はもうこの世にいません。」か、あるいは「僕はもうこの世からいなくなります。」のどちらかであろう。前者は既に死後の状態を表すし、後者はこれから死ぬという意味を表すであろう。「僕はもうこの世からいません。」は、下線のように、両方の正しい文章の一部が混在した文で、話し言葉ではあり得ても、普通の書き言葉ではあり得ない文である。これから死ぬという気持ちと同時に、既に死者の視点からの言葉が混入したのではないかと考えられる。

第三の点は、死と生とのパラドックスである。T君は「俺だって死にたくない。だけどこのままじゃ『生きジゴク』になっちゃうよ。」と遺書で述べている。『生きジゴク』になっても、生きていることに変わりはない、死ぬよりマシではないか、と思われるかもしれない。それではなぜ自殺するのか。しかし、先に論じたとおり、『生きジゴク』とは生きたまま社会的な死に到らされる地獄同然の状態なのである。肉体的には生きていても、それは亡霊のように彷徨っただけで、社会的に生きている意味をなさない存在に陥ることなのであり、肉体的な死以上に恐ろしい死なのである。

K君の遺書にも同様の矛盾がみられる。4人のいじめっ子達が自宅に出入りし、家族の大切なものや金を盗んだり、彼を使い走りとして奴隷扱いしたりするきっかけとなった事柄として、川で溺れさせられそうになったリンチまがいの出来事が遺書には図入りで詳しく述べられている。死の恐怖を感じたために、以後、いじめっ子達のいいなりになったと述懐している。そして多額の金品を要求されても応えることができなくなった、と自殺の理由づけをしているので

ある。ここでも、溺れ死ぬ恐怖が自殺に到るきっかけだったと解すれば、それはパラドックスであろう。自殺する位なら、なぜ死を覚悟で4人と命がけで闘えなかったかという疑問が残るであろう。また、なぜ家族や教師に命がけで訴えることが出来なかったのかという問いが浮かぶであろう。ここでも、T君同様、K君が一旦、非行グループに深くコミットしてしまったために、一方的な関係解消ができず、それが“いじめ”のキッカケとなった図式が垣間見える。そして、家族との絆がじょじょに断たれることは、K君にとって死以上に辛いことだったに違いない。

8. 人間関係回復の物語としての遺書

当然のことながら遺書はいじめた側を非難したり告発したりするためのものではないのは明らかであろう。遺書ならびに自殺は、もはやこのままでは、肉体的な死以上に恐ろしい社会的な死に直面して、何とかそれを回避しようとする最後の手段だったと考えられる。すなわち、自殺することによって死後の自分と残された家族や級友たちとの関係を再構築しようとしたものと考えられるのである。岸田（1987）の論評と重なるところもあるが、一番大きな違いは、T君が死後、人間関係を逆転させようとしたのではなく、まさに回復しようとしたのではないかと考える点である。また、K君にあっては、遺書を通じて、家族関係を回復しようとしたものと考えられる。

T君の語りかけた主な相手であるO、N、そして級友達に、自分を一人の社会的人間として認めてもらいたい、というのが遺書の趣旨ではないかと考えられる。岸田（1987）が指摘するように、確かに、O、Nに対して、彼らを愚かな者達として表現している面は否めないが、それよりも、彼らに「バカな事をするのはやめてくれ、」と訴え、「最後のお願いだ。」と結んだ文章によって、生きたままでは遂に実現しなかった、クラスの一員として皆に認められたい、という彼の悲痛な願いが直截に表れていないだろうか。

K君の場合の関係回復は、級友達よりもむしろ家族との間のものだったように感じられる。裕福な自営業の家庭で、優秀な兄弟の間であって、それを維持することに困難を感じ始めていたK君が、知らずしらず陥ったいわゆる非行グループへの接近は、決して、初めから一方的にいじめ——いじめられ、という関係ではなかったはずだ。長期にわたる人間関係の中で作り上げられた関係性として理解すべきであろう。K君には酷かもしれないが、遺書において、いじめっ子達4人が一方的に金品を盗み出し、K君にさらに要求し、走り遣いを強要したとは考えられない。それには、それなりの長期にわたるやり取りがあったはずなのである。その意味では、大畑（1996）の“いじめ”を教師がどのように感知し、如何に機敏な対処をするかという観点からの議論は、教育現場の問題意識としては妥当なものであろうが、トータルな現象の理解には距離がある。

K君の遺書で、殊更、いじめが（自殺の）原因であること（それは、表面上、まちがいない

が)、にもかかわらず、いじめっ子達の責任を追究しないでほしい、というようなことが書かれていることから、彼の自死が“いじめ”のみによると言い切れないものを感じさせるのである。これは、決して、いじめた側の責任を曖昧にすることを意味するものではないし、実際にK君に対してなされた“いじめ”が免責されるものでもない。

しかし、K君が遺書で目論んだのは、失われた家族との間の人間関係の再構築ということであると考えられる。自分が家族の中で、失った信頼の数々は、いじめられていた為の止むを得ない出来事であり、自分自身の責任ではない、ということを繰り返し述べているように感じられる。

「家族のみんなへ、14年間、本当にありがとうございました。僕は、旅立ちます。でも、いつか必ずあえる日がきます。その時には、また、楽しくくらしましょう。お金の件は、本当にすみませんでした。働いて、必ずかえそうと思いましたが、その夢もここで終わってしまいました。」「本当にすみません。いつも心配かけさせ、ワガママだし、育てるのにも苦労がかかったと思います。おばあちゃん、長生きして下さい。お父さん、オーストラリア旅行をありがとう。お母さん、おいしいご飯をありがとう。お兄ちゃん、昔から迷惑をかけてすみません。△△(弟の名)、ワガママばかりいっちゃダメだよ。また、あえるといいですね。」「なぜ、もっと早く死ななかったか」というと、家族の人が優しく接してくれたからです。」「最後まで御迷惑かけて、すみません。忠告どおり、死なせてもらいます。でも、自分のせいにされて、自分が使ったのでもないのに、たたかれたり、けられたりって、つらいですね。」「僕はもうこの世からいません。お金もへる心配もありません。一人分食費がへりました。お母さんは、朝、ゆっくりねむれるようになります。△△も勉強に集中できます。いつもじゃまばかりしてすみませんでした。しんでおわびいたします。」

これらの叙述は、一つ一つが家族への想いと、それが徐々に失われていく悲しみに彩られている。非行グループとの関係を断ち切らなければ家族との関係は失われると合点し、非行グループとの関係を自らの力では断ち切れないと感じた時、T君と同様、K君も、肉体の死を賭して、社会的な死（家族との絶縁）を回避する道を選んだものと考えられる。

9. 居場所としての社会的関係

T君は、厳しい父親に叱咤激励されて、強さを求め、本来の彼自身の性格とはおよそ懸け離れた非行グループへと接近し、父親が怖くて家へ帰れないと嘆き、O、Nが怖くて学校へ行けない、というように、中学生にとっての安心できる居場所としてもっとも重要な家庭と学校の両方を失った。

K君は、小学校までは優秀だったが、中学に行ってから恐らくそれを維持できず、知らず接近した非行グループの係わりの中ががんじがらめになったために、家族との関係が急速に悪くなり、家族との関係を修復しようとする非行グループと対立しリンチを受ける、非行グルー

プのリンチを避けようとするが家族の非難（時に体罰）を浴びるというジレンマに陥った。どちらも、社会心理学でいう回避—回避コンフリクト状態（「前門の虎、後門の狼」）で身動きが取れなくなっていたとも言える。

居場所というのは、恐らく、空間的な場所ではなく、それが保証する人間関係のことを指すのではないだろうか。T君もK君も、そうした本来もつべき温かい人間関係を、彼らの自己認識と対人関係のズレから、失っていき、最後にとった自死という方法によってしかそうした関係を回復できないところへ追い込まれたのは悲劇である。

人間関係を構築するには自我を中心とする物語が不可欠である。しかし、その物語が時として、人を死に追いやることも認識しておくべきであろう。二通の遺書に共通する「明るさ」は、居場所をなくし、社会的死へと追い詰められていた二人が、それぞれ、死への物語を紡ぎ出すことと引き換えに、ようやく自分の居場所を見出した安堵を表しているように思えてならない。

資料1：T君の遺書

家の人、そして友達へ。
突然姿を消して申し訳ありません。
(原因について) くわしい事についてはOとかNとかにきけばわかると思う。
俺だって死にたくない。だけどこのままじゃ「生きジゴク」になっちゃうよ。ただ、俺が死んだからって他のヤツが犠牲になったんじゃないか。だから、もう君達もバカな事をするのはやめてくれ、最後のお願いだ。
昭和六十一年二月一日

資料2：K君の遺書

いつも4人の人(名前が出せなくてすみません。)にお金をとられていました。そして、今日、もっていくお金がどうしてもみつからなかったし、これから生きていても……。だから……。また、みんなといっしょに幸せにしたいと思います。しくしく。小学校6年生ぐらいからすこしだけいじめられ始めて、中1になったらハードになって、お金をとられるようになった。中2になったら、もっとはげしくなって、休みの前にはいつも多いときで60000、少ないときでも30000~40000、このごろでも40000。そして17日にもまた40000ようきゅうされました。だから……。でも、僕がことわってればこんなことには、ならなかったんだよね。すみません。もっと生きたかったけど……。家にいるときがいちばんたのしかった。いろんな所に、旅行につれていってもらえたし、何一つ不満はなかった。けど……。
あ、そうそう！ お金をとられた原因は、友達が僕の家遊びに来たことが原因。いろんなところをいじって、お金の場所をみつけると、とって、遊べなくなったので、とってこいってこうなっ

た。

オーストラリア旅行。とても楽しかったね。あ、そーいえば、何で奴らのいいなりになったか？それは、川のできごとがきっかけ。川につれていかれて、何をするかと思ったら、いきなり、顔をドボン。とても苦しいので、手をギュッとひねって、助けをあげたら、また、ドボン。こんなことが4回ぐらい？あった。特にひどかったのが、矢作川。深い所は、水深5～6mぐらいありそう。図1みたいになってる。ここで㊤につれていかれて、おぼれさせられて、矢印の方向へ泳いで逃げたら、足をつかまれてまた、ドボン、しかも足がつかないから、とても恐怖をかんじた。それ以来、残念でしたが、いいなりになりました。あと、ちょっとひどいこととしては、授業中、てをあげるなとかテストきかん中もあそんだとかそこらへんです。

家族のみんなへ

14年間、本当にありがとうございました。僕は、旅立ちます。でも、いつか必ずあえる日がきます。その時には、また、楽しくくらしましょう。お金の件は、本当にすみませんでした。働いて、必ずかえそうと思いましたが、その夢もここで終わってしまいました。そして僕からお金をとっていた人たちを責めないで下さい。僕が素直に差し出してしまったからいけないのです。しかも、お母さんのお金の2万円を僕は使ってしまいました（でも、一万円は、〇〇さん=注お婆の名=からもらったお年玉で、バッグの底に入れておきました）まだ、やりたいことがたくさんあったけれど、……。本当にすみません。いつも、心配をかけさせ、ワガママだし、育てるのにも苦労がかかったと思います。お婆あちゃん、長生きして下さい。お父さん、オーストラリア旅行をありがとう。お母さん、おいしいご飯をありがとう。お兄ちゃん、昔から迷惑をかけてすみません。△△=注弟の名=、ワガママばかりいっちゃダメだよ。また、あえるといいですね。最後に、お父さんの財布がなくなったとっていただけけれど、2回目は、本当に知りません。

see you again

いつもいつも使いばしりにもされていた。それに、自分にははずかしくてできないことをやらされたときもあった。そして、強せいの的に、髪をそめられたことも。でも、お父さんは僕が自分でやったと思っていたので、ちょっとつらかった。そして20日もまた金をようきゅうされて、つらかった。

あと、もっともつらかったのは、僕の部屋にいるときに彼らがお母さんのネックレスなどを盗んでいることを知ったときは、とてもショックだった。あと、お金をとっていることも……。

自殺した理由は今日も40000とられたからです。そして、お金がなくて、「とってこれませんでした」っていっても、いじめられて、もう一回とってこいっていわれるだけだからです。そして、もっていかなかったら、ある1人にけられました。そして、そいつに「明日、12万円もってこい」なんていわれました。そんな大金はらえるわけありません。それに、お婆あちゃんからもらった1000円も、トコヤ代も、全て、かれらにとられたのです。そして、トコヤは自分でやりました。とてもつらかったでした（23日）

また今日も、一万円とられました（24日）

そして今日は2万円もとられ、明日も4万円ようきゅうされました(25日)あと、いつも、朝はやくでるのも、いつもお茶をもっていくのも、彼らのため、本当に何もかもがいやでした。

なぜ、もっと早く死ななかったかという、家族の人が優しく接してくれたからです。学校のことなど、すぐ忘れることができました。けれど、このごろになって、どんどんいじめがハードになり、しかも、お金もぜんぜんないのに、たくさんだせといわれます。もう、たまりません。最後まで御迷惑をかけて、すみません。忠告どおり、死なせてもらいます。でも、自分のせいにされて、自分が使ったのでもないのに、たたかれたり、けられたりって、つらいですね。

僕はもうこの世からいません。お金もへる心配もありません。一人分食費がへりました。お母さんは、朝、ゆっくりねれるようになります。△△=注弟の名=も勉強に集中できます。いつもじゃまばかりしてすみませんでした。しんでおわびいたします。

あ、まだ、いいたいことがありました。どれだけ使い走りにさせられたかわかりますか。なんと、自転車で、しかも風が強い日に、上羽角からエルエルまで、たしか1時間でいってこいっていわれたときもありました。あの日はたしかじゅくがあったと思いました。あと、ちよくちよく夜でていたり、帰りがいつもよりおそいとき、そういう日はある2人のために、じゅくについていっているのです。そして、今では「パシリ1号」とか呼ばれています。あと、遠くへ遊びにいくとかいって、と中で僕が返ってきたってケースはありませんでしたか。それは、金をもってとってこいっていわれたからです。あと、僕は、他にいじめられている人よりも不幸だと思います。それは、なぜかというと、まず、人数が4人でした。だから、1万円も4万円になってしまうのです。しかもその中の3人は、すぐ、なぐったりしてきます。あと、とられるお金のたんい¹が1ケタ多いと思います。これが僕にとって、とてもつらいものでした。これがなければ、いつまでも幸せで生きていけたの²に³と思います。テレビで自殺した人のやつを見ると、なんで、あんなちよつとしかとられていないんだらうっていつも思います。最後に、おばあちゃん、本当にもうしわけありませんでした。

《注》遺書にある「オーストラリア旅行」は十一月二日から五日間、家族と行った。「上羽角(かみはすみ)」は西尾市内の地名、「エルエル」は郊外型ディスカウント店のこととみられる。両地点は約十⁴離れている。「パシリ」は使い走りの意味。

参考文献

- 大畑憲一 いじめについての大誤解 近代文藝社 1996
 小此木啓吾 精神分析は語る——フロイトから現代へ 青土社 1995
 岸田 秀 嫉妬の時代 飛鳥新社 1987
 Klein, M. On identification. In New Direction in Psycho-Analysis. (ed.) M. Klein, P. Heineman, and R. Money-Kyrle. New York: Basic books. 1957
 小島康次 中学生の物語文にみる“いじめ”の構造——心理学的メカニズムと記号論的アプローチ 北海学園大学開発論集 2000

- 小島康次・菊地弘明 大学生の意識からみた“いじめ”の実態 北海学園大学開発論集 1997
- 澤田愛子 末期医療からみたいのち——死と希望の人間学 朱鷺書房 1996
- 菅野盾樹 いじめ＝〈学級〉の人間学 新曜社 1986
- 竹川郁雄 いじめと不登校の社会学——集団状況と同一化意識 法律文化社 1993
- フロイト、S. 快感原則の彼岸 井村恒男・小此木啓吾訳 人文書院(フロイト著作集 第6巻)
1970
- 宮川俊彦 このままじゃ生きジゴク——鹿川裕史君、死のさけび 誠文堂新光社 1986